

脚本篇

映画文学人生論

- 061) 裸の島 監督：新藤兼人 脚本：新藤兼人
062) たそがれ清兵衛 監督・脚本：山田洋次 朝間義隆
063) 夫婦善哉 監督：豊田四郎 脚本：八住利雄
064) 人生劇場 飛車角 監督 沢島忠 脚本：直居欣哉
065) 砂の器 監督：野村芳太郎 脚本：橋本忍 山田洋次

『多元的宇宙』を読み出したのは今年の夏のことである

映画の脚本は原作に忠実か、不実か、という問題を考えてみよう。同時通訳者米原万里の言葉を借りれば、不実な美女か 貞淑な醜女か、だが、現実の世の中には忠実な美女も不実な醜女もいる。

原作を利用する場合、映画会社は原作使用料を作者に支払う。契約さえすれば、あとは監督の思うがまま、どのように料理してもよいことになっているはずだが、作者が原作の大幅改変に不満を抱き、裁判沙汰になる場合もあるという。

新藤兼人『シナリオの構成』によれば、文学と映画は別物だ。文学が言語でつくった芸術だとすれば、映画は言語以外のものも利用している。

映画として興行的に成功し、原作者の名声がかまわり、観客にも満足を与えた例を脚本の観点から五本選んでみた。

新藤兼人『裸の島』新藤兼人

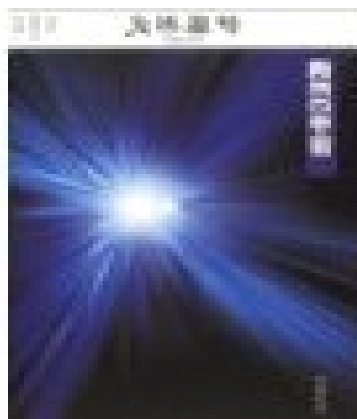
織田作之助『夫婦善哉』八住利雄

尾崎士郎『人生劇場』直居欣哉

松本清張『砂の器』橋本忍 山田洋次

藤沢周平『たそがれ清兵衛』山田洋次 朝間義隆

『裸の島』はセリフのない珍しい脚本だが、原作者と脚本家が同一人物、しかも原作がそのまま脚本だから問題はない。



脚本篇

映画文学人生論

『夫婦善哉』の筋は原作に忠実な流れになっているようにみえるが、前後十年の話を昭和七年に限定している。主人公の柳吉はどもりがちな男なのに、柳吉役の森繁久弥は「おぼはん、たよりにしてまっせ」と口先がなめらかで、調子がよい。

『人生劇場 飛車角』は、原作の青春篇や愛欲篇には登場しない人物が主人公になっている。脚本は直居欣哉だが、指示したのは当時東映東京撮影所所長、後に社長の岡田茂だという。

『砂の器』は交響曲の演奏、親子の旅の回想、警察の捜査会議との同時進行という構成で、「小説では絶対に表現できない」と作者に言わせた。

『たそがれ清兵衛』は原作と映画とではほとんど異次元の世界だ。藤沢周平の世界と山田洋次の世界がずれていることから私は夏目漱石が修善寺の大患で急死に一生を得た直後に病床で読んだという書物を連想した。ウイリアム・ジェームズ心理学教授の『多元的宇宙』である。

「病牀にありながら、三たび教授の『多元的宇宙』を取り上げたのは、教授が死んでから幾日目になるだろう」と、漱石は『思い出す事など』に記している。

私は明治四十三年夏にタイムトリップして、療養修善寺の菊屋旅館で療養中の漱石を見舞い、多元的宇宙』の話をお伺いしたいと思った。

地芝居の口から出まかせ迷セリフ